

豊庄だより



第 565 号 2019年 5月 27日

今年はいつ生まれるんだろう？ずっと気になっていたカマキリの誕生。バスハイクの前日(5月10日)、巣から何匹か生まれてくるのが確認できました。例年であれば、あふれるばかりの巣立ちの風景が見られるので

福岡市早良区南庄2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

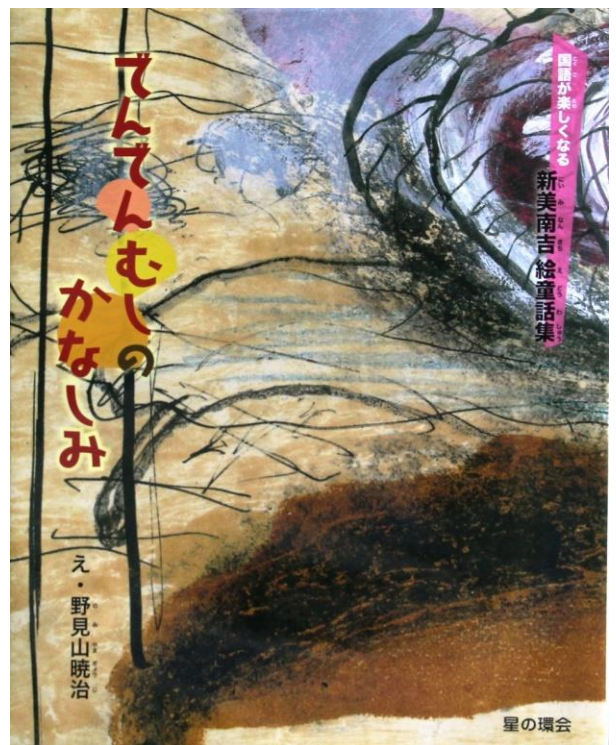


すが、数匹のみで今年はだめなのかなあと考えていました。ところが次の日の5月11日、うじゃうじゃとカマキリの子どもたちが誕生していました。昨年が5月9日、そして今年が5月10日と、自然のなかで生活している生き物たちは、気象情報などを知らなくてもわかっているのですね。巣から出てきた子どもたちは、保育園の床や壁を這い回り、いつの間にかどこに行ったかわからなくなってしまいました。そこで、数匹だけ虫かごに入れて観察することにしました。誕生から2週間過ぎましたが、まだ生きています。何を食べて生きているのでしょうか。虫かごにはもう一つ生き物がいます。それはカタツムリ。このカタツムリ、私が命の恩人です。もう1か月近く経つでしょうか、いつものように自宅からテクテクと歩

いて保育園に向かっていると、アスファルトの上にコロんと転がっている褐色の物体を見つけました。カタツムリです。歩道がない上で、このままでは車に潰されてしまうと思い、救ってあげました。保育園に持ってきて、虫かごに入れました。カマキリはその後に入れたので、カタツムリのほうが先輩です。でも、恥ずかしいのか、殻の中に閉じこもり、ほとんどその姿を見せてくれません。私は、ふと新美南吉の「でんでんむしのかなしみ」という話を思い出しました。こんな話です。

ある時、でんでん虫は自分の背中の殻に悲しみがいっぱい詰まっていることに気づき、友達のでんでん虫を訪ね自分の不幸を嘆きます。すると友だちのでんでん虫も、実は自分も同じなんだと答えます。そこででんでん虫は別の友だちを訪ねますが、自分も同じだと答えます。そこで初めてでんでん虫は、みなそれぞれ悲しみを背負っていることに気づきます。

とても短い童話です。作者の新美南吉は1913年、愛知県半田市の生まれ。東京外国語学校を卒業した後、小学校や高等女学校の教師をしながら執筆活動を続けました。1943年、結核のため、29歳で亡くなりましたが、「ごんぎつね」をはじめ、「てぶくろをかいに」や「おじさんのランプ」など、心に残る作品を残しています。作品が書かれたのは戦前。しかし、辛いことに会うと自分だけが不幸で、世の中の人々はみな幸せで満たされていると思ってしまうという感覚は現代にも通じるものがあります。この「でんでんむしのかなしみ」という



話、最近、素敵な絵本として出版されました。絵を書いているのは野見山暁治さん。福岡県嘉穂郡穂波町の出身で、とても印象的な絵です。図書室にありますので、手にとって見てください。(※「でんでんむしのかなしみ」については、毎日新聞日曜版に連載中の心療内科医の海原純子さんの「新・心のサプリ」を参考にしました。)